

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：32694

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02875

研究課題名(和文) 近世末の民衆的宗教における女性の役割

研究課題名(英文) Role of Women in Popular Religious Movements in Late Tokugawa Japan

研究代表者

梅澤 ふみ子 (Umezawa, Fumiko)

恵泉女学園大学・人間社会学部・名誉教授

研究者番号：60126000

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本では、女性は罪深く不浄であるという観念が平安時代に現れ、近世には社会全体に広まった。本研究はそうした社会通念への批判や抵抗が近世末の民間の非公認の信仰集団の中に現れたことを明らかにした。具体的には富士信仰を基盤に信者集団を形成した不二道と1827年に京坂で切支丹として摘発された信者集団を対象として、女性の役割を調査し、前者においては人間男女平等な理想世の観念に基づいて女性信者が活躍し、後者においては妻や女の役割を拒否した女性たちが重要な役割を担ったことを明らかにした。成果としては2冊の図書の各1章を執筆し、うち1冊が2017年に刊行された。また2017年に国際学会EAJSで研究発表を行った。

研究成果の概要(英文)：The notions of women's sin and pollution appeared in the Heian period and spread widely in Japanese society by the Tokugawa period. This research examined how criticism and resistance to such notions emerged from some unauthorized religious groups in the late Tokugawa period. It focuses on Fujido, an organization of believers in the cult of Mt. Fuji, and a secret group of Christian believers arrested by the local government of Osaka in 1827. Through analyzing sources of information about these groups, this research clarified that Fujido encouraged its female members to play as important roles as those of male members based on its teachings about the ideal world, where the equality between both sexes would be realized, and that female practitioners belonging to the Christian group, who rejected the female gender role, played major roles there. As a result of the research, Umezawa published a chapter of a book and gave a presentation at an international academic conference in 2017.

研究分野：人文学

キーワード：日本近世史 日本近世宗教史 日本女性史 民衆宗教 富士信仰 キリシタン

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の宗教におけるジェンダー観念や女性の役割については、1980年代後半以降研究が進み、女人禁制のような女性だけを対象とした禁忌と女性特有の不浄と罪業の観念によって、女性は宗教の領域で主要な役割から排除されたことが明らかにされた。日本における女性不浄観・女性罪業観の成立と展開については、西口順子・西山良平・服藤早苗・加藤美恵子らの研究によって、平安時代から時代を下るとともに肥大化する様相が解明された。女人禁制の成立と展開に関しては、阿部泰郎・牛山佳幸・鈴木正崇により、その起源や言説について考察がなされ、本来は女性不浄観とは必ずしも関係がなかった聖域や異界における禁忌が、後になって女性不浄観と結びつき相互に支え合ったことが明らかにされた。

これらの研究は少数の例外を除き、古代・中世の宗教の領域における女性の周縁化を扱っていたが、脇田晴子の触穢思想の地方的展開について研究や、平雅行の女性罪業観の受容についての研究により、女性不浄観や女人禁制の慣行が日本の全社会的な現象となるのは、むしろ中世後期から近世にかけてであったことが明らかにされた。したがって宗教におけるジェンダー観念や女性の役割の研究を進めるには、近世における実態の解明が必要であると考えられた。

(2) 同じ近世という時代であっても、地域や階層によって女性の罪業観や不浄観の受容の程度や、影響力の大きさに関して差異があったことも、従来の研究で明らかにされてきた。また宗教組織の性格によっても差が見られることが予想された。すなわち檀家組織や村落の宮座のように政治社会制度に組み込まれた宗教組織において女性の活動は限られていたのに対し、社会制度に組み込まれる度合いが弱く任意の加入・脱退が可能な宗教組織の中には、女性の活動が厳しく制限されていないケースがあることが予想された。

事実、如来教・天理教・大本教など近世後期から近代初期にかけて現れた創唱宗教の場合は、女性教祖は当時の社会通念だったジェンダー観念の束縛を離れ外に踏み出したことが明らかにされている。しかし教祖ではない一般信者の女性たちや、民間から現れた新宗教の中でも既に消滅した宗教集団の女性信者たちは、ほとんど研究対象とされなかった。そのためこうした女性たちの意識や行動、彼女たちの活動の場となった宗教組織の形態、男性信者との関係などの研究はまだ進んでいない。したがって今後の研究の方向として、現在まで存続する新宗教の女性教祖に限らず、既に消滅した宗教集団の一般信者の女性たちにも光を当て、その行動や役割を調査することが必要と考えられた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、近世後期の民衆的宗教集団における女性の位置と役割をあきらかにすることである。本研究は富士信仰に基づき俗人信者によって民間で組織された「不二道」を中心的に取り上げる。不二道は独自の教義に基づき四民・男女の間に尊卑がない世の実現を唱え、社会や家庭における男女の役割の見直しを訴えた点、及び幕末には一万人以上の信者を擁して民間で相当の影響力を持つに至った点で、本研究にとって注目値する。しかし不二道は明治政府の宗教政策への対応をめぐる分裂し、一方は教義を変えて神道実行教となり、他方は非公認のまま20世紀前半に消滅した。そのため不二道の女性信者に関する研究はほとんど行われてこなかった。

(2) 本研究は、近世後期の不二道女性信者の宗教活動の実態を、彼女たちの社会的・経済的背景や彼女たちに対する男性信者の対応を考慮しながら調査し、当時の地域社会及び民俗信仰を取り巻く政治社会状況の変化を背景に、女性信者たちの不二道組織内での位置と役割を具体的に明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では近世末期から維新时期にかけての政治・社会的変化と、その時代の地域社会の状況を背景に、不二道の組織と運動における女性信者の位置と役割を具体的に明らかにすることを目指す。その目的を達成するために以下の調査を行う。

富士信仰に関する研究書・論文・史料集、及び市町村史等の資料編、及び各地の資料館が所蔵する文書から、当該時代の不二道に関連する情報を収集し、女性信者の位置と役割を分析する。

不二道の地方的リーダー役を務めた信州飯田の松下千代(1799-1872)の子孫に伝わる「松下祐輔氏所蔵文書」(本科研費に基づく研究開始時には埼玉県立文書館と松下祐輔氏宅に保管され、2015年10月に松下祐輔氏から飯田市歴史研究所に寄託された)を調査し、そこに含まれる膨大な量の不二道関係史料の概要を把握する。

不二道が展開した地域、特に関東地方と伊那地方を中心として地方史の史料を収集し、当該の時代における宗教的文化的状況や、政治・社会的背景を調査する。上記、を通じて、不二道の女性信者の行動とその背景を具体的に明らかにする。

不二道の女性信者の行動の特徴を明らかにするため、同時代の他の民間の非公認宗教集団の中で女性の活動がわかる史料の発見を目指し、入手した史料を分析して不二道の場合と比較する。

4. 研究成果

(1) 本研究では、近世後期の民間に成立した非公認宗教集団の一つである不二道を主な研究対象として取り上げ、そこではどのような女性観が形成されたか、女性信者たちはどのような考え方に基づきどのように行動したか、不二道集団内では男性信者と比較して女性信者の位置や役割にどのような特色があったかについて、収集した史料に基づき考察した。また、後述のように、18世紀末か19世紀に京都・大坂地域で形成され文政年間に「切支丹」として摘発された信仰集団も併せて取り上げ、この信仰集団に属した女性たちについても思考や行動の特色を明らかにした。

(2) 不二道の概略と不二道の女性観については、岡田博及び宮崎ふみ子(梅澤ふみ子)のこれまでの研究により、以下の特色がある程度明らかにされてきたが、本研究では具体的な例証を多数発見してこれを裏付けた。

不二道は民俗信仰のひとつである富士信仰に基づき、富士講身祿派の元祖である食行身祿(1671-1733)の教義を信奉する信者集団である。

食行身祿の教義の核心には理想世の追求があり、その理想世とは身分・性別の差別なく人々が勤勉に働き、利己心を捨て助け合い、天の恵みを受けて繁栄する世だった。このような理想世実現の志向は不二道に受け継がれた。

不二道は、19世紀初頭に江戸近郊鳩ヶ谷で民間の富士行者小谷三志(1766-1841)とその弟子たちによって組織され、幕末まで関東・東海・信濃・近畿・中国地方・九州北部に中核的な信者だけでも約一万人を擁するに至った。これは同時代の新宗教としては最大の規模である。

不二道信者は勤勉と相互扶助を実践し、水害被災地への種籾送付、労働奉仕による道路・橋・堤防修理などの公益的事業の実施、将軍の日光参詣のために動員された人馬への草鞋・飼葉供与などの種々の企画を実行した。この企画には全国の男女の信者が参加した。

食行身祿の教義には女性不浄観・罪業観の否定という特徴があったが、不二道はそれを発展させ、女性は本来男性に劣らない能力を持つとして、信仰・家業・家庭においてその能力を発揮することを女性に求めた。

このような女性観に基づき、不二道では女人禁制の慣行を批判し、女人禁制の山であった富士山への女性登山を推進した。

(3) このような研究成果を発展させ、本研究では女性信者たちの活動の舞台となった不二道の組織及び社会運動への取り組みを調査し、その特色を考察するとともに、女性信者の活動の具体例を明らかにした。史料と

しては、主として埼玉県川口市文化財センター分館郷土資料館所蔵「小谷三志関係文書」、岡田博による不二道関係史料の翻刻である『鳩ヶ谷市の古文書』第2集 第27集、岡田博編『幕末期不二道信仰関係史料』、及び長野県飯田市立歴史研究所蔵「松下祐輔氏所蔵文書」、飯田市立美術博物館所蔵「氏乗木下家文書」に含まれる不二道関係の文書や記録を用いて調査し、以下の結果を得た。

第一に、不二道の組織の特色を明らかにした。

不二道信者組織の基礎単位は日常生活圏内の信者集団であること、その組織原理は個人参加を原則とし加入・退出が基本的に任意に行われる講集団と類似すること、そのような信者組織では社会的強制力が働きにくく性差や身分差が顕在化しにくいこと

不二道全体の組織は中央集権的な上意下達型ではなく、基礎単位である地域的信者集団が双方向に繋がり合うネットワーク型の組織であり、それらの結節点ではネットワークの運営に携わる「世話人」がボランティアとして活動していたこと、

不二道内部では男女の信者たちが地位や身分の反映されにくいファーストネームで互いを認識し合ったこと、先達の信者が名乗る「行名」にも性差や身分差がないことを明らかにした。これらは、不二道組織内で女性が活動するのに有利な条件として作用した。

第二に、不二道の日常的宗教活動や社会的活動に関する史料を調査し、水害被災地への種籾供与、道路・橋・堤防など公共施設の修復工事、幕府への公認請願運動の全体像とその担い手たちを具体的に明らかにした。また、このような公益を目的とする運動に関する言説の分析から、不二道は地域住民の共同性に基づく「公共」概念を形成したこと、それは幕府や藩が統治者という立場から作り上げた「公共」概念とは別個のものであったことを明らかにした。

第三に、小谷三志や信者たちが交わした書簡、日常活動及び公益目的の事業に関する記録などの分析を通じて、不二道信者の女性たちの以下の活動を具体的に明らかにした。

男女の信者は居住地や近隣地域の信者集団の共同礼拝に参加した。少数ではあるが、礼拝の集会でコーディネーターを勤めたり教話を行ったりする女性がいた。女性信者は男性信者と共に富士山参詣などの行事に参加した。特に女性登山が一時的に解禁された1860(庚申)年には多数の女性信者が参加し、不二道の団体登山では集団のアイデンティティを示すと同時に団体登山の信者たちを誘導する役目の「旗持」役を女性たちが担当した。女性信者の中には居住地や近隣地域で布教を行う者がいた。

女性信者は男性信者と同様に、被災地救

援や公共工事の企画で労働奉仕した。女性信者の中には、松下千代のように公益事業を企画したり代表者として藩の役所や村落と交渉したりする者もいた。ただし、このような任務を遂行するためには社会的経験が必要なため、女性で代表者を務める者は稀だった。

不二道のネットワークの運営にとって「世話人」は極めて重要な意味を持っていたが、時間をとられ活動費も自弁しなければならぬため、女性の「世話人」は少なかった。しかし松下千代のように全国的信者ネットワークの「世話人」を務める場合があった。

活発に活動する松下千代のような女性信者は、後続の女性たちのロールモデルとなり、彼女たちの積極性を引き出した。

(4) 不二道の女性信者の意識や行動を、同時代の他の民衆的宗教集団における女性宗教者との比較を通じて相対的に把握するため、本研究は文政10年(1827)年に大坂東町奉行所によって摘発され、同12年に処刑された「京坂切支丹」の女性信者を調査した。この一件では切支丹の「天帝」への帰依を認めたと中国で出版された切支丹関連の禁書を所有する別件の被疑者の計6名が処刑されたが、切支丹と自認した者のうち3名が女性だった。

(5) 文政期の京坂で摘発された切支丹一件の記録としては大坂西町奉行所与力が作成した写本である慶応大学図書館所蔵「邪宗門一件書留」(謄写本は東京大学史料編纂所蔵)が最も情報量が多く、基本史料となる。ただし、その写本に含まれる取り調べの記録や供述書は、老中の指示により事件を担当した尾坂東町奉行所が密かに改ざんした後の書類を写したものだ。改ざんを命じたのは、天帝像を拝む目的で長崎に行き踏絵をしたという一人の女性信者の供述が、幕府にとって予想外で不都合な事実だったからである。本研究の過程で、梅澤は改ざん前の取り調べ記録や供述書の写本を東京大学明治新聞雑誌文庫の吉野作造文庫で発見し、初めて翻刻を行い、調査した。

(6) 幸田成友、海老沢有道、大橋幸泰らの先行研究と、新発見の文書を含む史料の分析を通じて、本研究では以下の事柄を明らかにした。

大橋は「京坂切支丹」の信仰集団を3つのサブグループに分類する。本研究ではその分類が妥当であることを確認した。また、女性信者たちはその内の一つのサブグループを構成し、他のサブグループとほとんど交わらなかったことを確認した。

男性信者は講組織を作ったり単独で信仰したりしていたのに対し、女性たちは秘密性が高く関係が緊密な師匠 弟子の縦の系譜

を作った。

男性信者は宗教行為を職業とはしなかったが、女性宗教者は表向き「稲荷下げ」を行う民間宗教者を装い、呪術的祈禱によって生計を立てながら信者を集めた。

男性信者は布教を試みなかったが、女性たちは秘密を保ちながらも同信者を増やそうとして、可能性がある女性を勧誘した。

「切支丹」の教義・儀礼・戒律をわずかしら知らなかったため、女性信者たちは独自に戒律や儀礼を創作した。そこには結婚の拒否や夫婦の性生活の禁止を含む厳密な性的禁欲と厳しい修行の継続的実践を強調する点に特色があった。

以上の検討から、京坂切支丹の女性宗教者は不二道の女性信者と多くの点で対照的であるが、近世社会の通念であったジェンダー観念を拒否する点には共通性が見られる点明らかになった。

(8) 本研究の成果を今後発展させるために、今後は以下の調査・研究・出版の企画を進めている。

不二道の女性信者に関する研究成果のうち、信者ネットワークにおける女性信者の活動に関する研究成果を発展させ、国内外の日本史研究者及び女性史研究者と共同で、Women and Networks in Nineteenth-century Japan という題目で英文の論文集を作成刊行する企画を進めている。

「松下祐輔氏所蔵文書」は本研究により初めて本格的に調査されたが、女性信者の行動に関する史料以外の調査は不十分なので、今後も調査を継続する必要がある。

京坂切支丹集団とその摘発・審理・処罰に関する史料からは、取り調べの対象となった「切支丹」信者に関する情報だけでなく、この件を審理・処理した幕府側の行政・司法組織とその運営についても貴重な情報が得られる。そこで将来の研究に資するため、幕府の大坂行政担当者についての専門家である藪田貴氏を含む国内外の研究者と共同で多角的にこの一件の研究を行い、この件に関する新出史料である「邪宗門吟味書」を「邪宗門一件書留」と比較しつつ翻刻し、注釈・解題・解説を加えて刊行する企画を進めている。

京坂切支丹事件は大塩平八郎が担当したことあって、日本国内の研究者の間ではある程度知られているが、海外の日本研究者の間ではまだほとんど知られていない。キリシタン禁令から2世紀も経った後に京都・大坂のような国の中央部でキリシタンを自認する宗教集団が見つかり、それが長崎の潜伏キリシタンとは別系統の集団だったことから、この一件は海外の研究者の関心を集めつつある。梅澤ふみ子(宮崎ふみ子)はケイト・ナカイ及びマーク・テーウェンと共同でEuropean Association for Japanese Studiesの2017年国際研究集会において京坂切支丹一件に関してパネルを行って発表した。今

後もこの研究者たちと共同でこの件の基本史料の英訳に注・解説を加えて出版する企画を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件) Fumiko Miyazaki (Umezawa), “Inari Mediums/ Christian Witches: Gender in the Keihan Christian Incident”, European Association for Japanese Studies, September 2017

〔図書〕(計 1 件)

Albert Welter, Jeffery Newmark, eds., Albert Welter, Jeffery Newmark, Eric Goodell, Wang Jianping, Bettina Gramlich-Oka, Fumiko Miyazaki (Umezawa), Mark R. Mullins, Franklin Rausch, Religion, *Culture and the Public Sphere in China and Japan*, Ealgrave MacMillan, 2017.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

梅澤ふみ子 (UMEZAWA, Fumiko)

恵泉女学園大学、人間社会学部、名誉教授

研究者番号：60126000